

都市幼児の健康・安全行動の形成 における母子相互作用に関する研究

齋藤 歎 能 (横浜国立大)

研究目的

近年、わが国においては産業化、都市化の進展等により、人間の日常生活の能率化、利便度が進んできている。その反面、生活の機械化、作業の単調化及びopen spaceの不足等は運動不足を招来し、それが人間の健康問題として大きく浮き上がってきている。

このように生活環境が変化してくるにつれて、都市幼児に疲れやすい、食欲不振・カゼをひきやすい等の症状を訴える幼児の増加や身体の形態発育の加速化に比較して運動機能発達等体力の相対的低下を指摘する研究報告が多くみられる。これらは家庭に於ける母親の支配的過保護との係わりをもつものという結果の報告もみられる。これは保健指導において都市的特性として重視すべき問題である。今回の研究では、このような点から幼児期の発達課題として生活習慣・運動機能・健康度・遊びと環境・事故災害などに視点をおき、都市幼児の健康と安全に関する行動形成における母子相互作用について検討を行なったので、その概要について報告する。

研究方法及び内容

今回の研究では都市幼児の健康と安全に関するアンケート調査を実施して、健康と安全に関する行動形成における母子相互作用について研究したものである。

調査対象：東京都・神奈川県の幼稚園・保育所の3歳の男女、5歳の男女2,500名である。アンケートの回収数は2,073名で、回収率は81.5%である。

調査方法：調査用紙を幼稚園・保育所を介し、対象幼児の保護者に配布し回答を求めたものである。

調査期間：昭和55年11月から12月にかけて実施した。

調査内容：今回は「都市幼児の健康安全調査票」

を作成した。その内容は、幼児の生活環境・幼児の発育状態・健康状態・幼児の生活習慣・幼児の遊び・幼児の事故・母親の養育態度・母親の保健行動等について34項目である。

なお、今回は5歳児について報告する。

調査結果

○幼児の健康状態

病気がちのものは3.6%にすぎず、他のものは健康であると母親は評価している。

日常みられる微症状で最も多いものは咳嗽で28.1%のものにみられ、次いで湿疹(17.1%)発熱と乗物酔いが続きそれぞれ15.9%であった。また、特に症状のみられないものは43.9%であった。

幼児の食欲については、食欲のあるものは41.5%、少食のものは35.4%、むら食いは22.0%で、食欲のあるものは咳嗽、腹痛などの微症状がみられる傾向が強い。

○幼児の事故発生と事故防止について

医療を必要とする事故のあったものは対象の48.8%である。家庭における事故防止に関しては、危険な遊びをしないように言葉で注意しているものは80.5%、整理整頓に心掛けているものが48.8%、危険を点検しそれを補修するといった消極的な危険回避策をとる母親が多く、危険物を持たせないものが57.3%、服装を身体に合ったものにするものが30.5%と具体的で積極的な安全教育を心がけている母親の割合は少ないことがわかる。

事故発生時における母親の態度としては不注意を説明するものが62.2%と最も多い。

○食事について

間食を与える母親の態度には、時間を決めて与えるといった好ましい与え方をしているものが42.7%、ほしがる時に与えるといった幼児本意で好ましくない態度を示すものが同数の42.7%

にみられる。

幼児が食事をしないときの母親の態度については、努力して食べようとしているときに幼児をほめてやるといった奨励的態度を示すものは70.7%にみられ、しつけが出来ていない態度であるような幼児の言いなりになるとか母親の気分で叱ったりするものが合わせて30.5%みられる。食事については母親は奨励的態度を示すものが多いことはよい傾向と考えられる。

○就寝について

幼児が寝つきが悪いときには注意して寝かせる母親が84.2%と最も多い。しかし、本を読んだり、歌をきかせたりして寝かせる情緒的な働きかけをする母親は少ない。

○幼児の生活習慣の自立について

排泄・食事・衣服の着脱・言語による苦痛の訴え・信号で道路横断について調べた。これらの生活習慣の自立は十分に出来ていることがわかる。

○運動機能発達について

ブランコ乗り・片足ケンケン・自転車乗りについて調べた。これらの運動機能の通過率は片足ケンケンを除いて5歳児の発達としては妥当なものである。片足ケンケンの通過率は78%にすぎず低い。これは戸外活動が十分にできないために身体調整能(平衡)が低いためであり、運動能力が十分に発達していないことを示す結果とみなしてよからう。

○清潔に関する習慣の自立について

歯磨き、手洗い・うがいについて幼児と母親に対して調査した。幼児が母親の指示なしにこれらの習慣の自立が成立しているものは排泄後の手洗いが最も高く65.9%に達している。しかし、帰宅後のうがいはわずか17.1%の幼児にのみ親の指示なしの自立が可能となっているにすぎない。これらの生活習慣の自立には母親の習慣との関連が非常に強い。すなわち、母親で帰宅後のうがいを必ずするものは37%弱であり、朝晩の歯磨き、食事の手洗いは80%以上の母親が行なっていることに比してはるかに少ない。生活習慣の自立にはモデルとしての母親の実践が重要な要因となっていることがわかり、幼児の保健教育にとって母親は卒先にして実践することが必要である。

○育児需要及び母親の保健行動について

育児知識の導入には新聞・雑誌が多く、テレビは比較的少ない。公報はよく活用されており、必ずみるものは47.6%に達している。一方、母親クラブ・婦人会など地域組織に参加しているものは9.8%にすぎない。このことからみて、母親は育児や健康に関しては個人としての情報の蓄積に終っており、これらの導入した知識や情報を以って地域社会の活動に参加するものが少なく、社会的連帯としての実践は非常に低いレベルにしかないことがわかる。

平常の育児上の問題についての相談相手は夫が最も多く82.9%にも達しており、次いで友人・知人・隣人に相談するもの67.1%・姑41.5%実母35.4%となっている。一方、専門職の利用は少ない。核家族が多い都市に於いては夫が相談相手として頼られることは当然であろう。また、友人・知人・隣人といっても地域社会における広い意味ではなく限られた人達からの援助とみなすことができる。都市においては地域社会活動のなかで育児の援助を行なう体制の確立を図る必要も十分に考慮しなければならぬ。

○幼児の健康管理・健康増進について

母親が幼児の健康状態を判断する際、食欲を目安としているものが67.0%と最も多く、次いで活発さ・顔色が目安とされ、その割合はそれぞれ65.9%・58.5%となっている。この傾向は5歳児の母親の行動としては当然のことである。

幼児が園で受けた健診結果をみない母親は12.2%にすぎず、大多数の母親は健診結果を知っていることになり、健診で指摘された点の改善に努力しているものが93.9%にも達しており、積極的な保健行動を母親はとっているとみることが出来る。しかし、園以外の健診を積極的に受けているものは12.2%にすぎない。その受診しない理由には必要性を認めていないものが59.8%にも達している。この点からみて、新しい地域保健活動として施設と地域との連携をはかる必要があると思われる。

園に集団カゼが流行しそうな時の方法として、母親の考えとしては、園児全体の体力増進を図ることをあげているものは43.9%で最も多く、予防接種をするといっているものが35.4%、休園措置をするものは19.5%となっている。一応積

極的な態度を示す母親が多いことにはなるが、予防接種も公衆衛生の立場からいえば重要な予防法であるに違いない。

具体的な健康増進法については、早寝早起き（80.5%）、栄養摂取（79.3%）、戸外遊び（73.2%）、薄着（69.5%）、運動による体力づくり（64.6%）などをあげているものが多く、規則正しい生活の確立と戸外遊びを中心とした体力づくりが主体と考えていることがわかる。しかし、親子が一緒になって体力づくりのために運動をしているものがわずか18.3%にすぎないことは注目に値しよう。また、幼児を運動クラブなどに通わせているものも7.6%のみである。体力づくりが健康増進のなかで必要であることを指摘しながらも、積極的に親子でそれを実践しようとする態度が認められないのである。それは、母親が幼児の遊び相手をよくするものが8.5%にすぎないことから理解できる。母親が幼児の遊び相手をするときの状態は、短時間でも集中的に遊ぶ傾向がみられる反面、テレビをみたり仕事をしたりしながら遊ぶといった「ながら」族が約30%にみられる点に注目したい。すなわち、現代の育児には「ながら育児」が存在していることになる。

幼児と遊んでいるときの母親は楽しく充実感をもって母性として成熟している状態にあるものは57.3%にみられ、よりよい態度を示しているものが多いことになる。しかし、拒否的態度として「おっくう」と感じているものが7.4%、怪我を心配したり汚れを心配したり、幼児の遊び方に対してイライラしているものが14.7%にみられる。一方、幼児と遊ばない母親の理由で最も多いのは忙しいといっているものが22.0%、幼児に遊びに意欲がないものが7.3%、遊びに教育的意義を

認めず「けいこ」ごとをさせる母親が7.3%など問題が認められるものがみられることを十分に知っておかなければならない。また、幼児が母親なしで遊べるといっものも17.1%にあることは、これらの幼児では遊び方がかなり確立しているというよい例にもみられる。

母親が幼児と活動遊びを一緒にするときには幼児の自主性を尊重しているものが39.0%に認められる一方、一緒に活動的な遊びをしているものが12.2%もあることも知っておかなければならぬ。

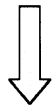
結 論

以上のことから都市幼児は微症状や運動機能が低いものもあるなど戸外遊びや運動が不足していることを証明するような所見がみられる。しかし、母親は健康に対して積極的な態度を以って留意しており、食欲を目安にしたりして幼児の健康状態の観察をしたり、規則正しい生活に心がけたり等色々と工夫していることも認められた。

帰宅後のうがいにみられたように、母親が健康生活のための習慣自立には必要なモデル化が十分に確立していない場合、母親が幼児と一緒に遊ばない場合、幼児との遊びを「ながら族」的態度で実践している場合など、母子相互作用上好ましくない動作も決して少なくないことも認識しておく必要もある。

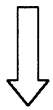
現代は情報化時代といわれるが、育児知識は個人のレベルで蓄積されているにすぎず、それを社会化し、地域活動に導入していこうとする熱意に欠けていることも判明した。

今後、今回得られた結果を基に健康・安全のための母子相互作用のよりよい方針性を検討したい。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



研究目的

近年,わが国においては産業化,都市化の進展等により,人間の日常生活の能率化,利便度が進んできている。その反面,生活の機械化,作業の単調化及び open space の不足等は運動不足を招来し,それが人間の健康問題として大きく浮き上がってきている。

このように生活環境が変化してくるにつれて,都市幼児に疲れやすい,食欲不振・カゼをひきやすい等の症状を訴える幼児の増加や身体の形態発育の加速化に比較して運動機能発達等体力の相対的低下を指摘する研究報告が多くみられる。これらは家庭に於ける母親の支配的過保護との係わりをもつものという結果の報告もみられる。これは保健指導において都市的特性として重視すべき問題である。今回の研究では,このような点から幼児期の発達課題として生活習慣・運動機能・健康度・遊びと環境・事故災害などに視点をおき,都市幼児の健康と安全に関する行動形成における母子相互作用について検討を行なったので,その概要について報告する。